

ブサーガナシーについて

盧 姜威

1. はじめに

「ブサーガナシー」というのは、沖縄方言で沖縄空手の「武神」のことを指すのである。沖縄空手は、現在世界的に普及発展を成し遂げているが、沖縄空手の由来について、未だに多くの課題が横たわったままである。例えば、沖縄空手はいつ、どのようにして発生したのか。また、そのルーツはどうなっているのかについては、まだ未解明のままである。

今まで、沖縄空手は何らかの形で中国武術の影響を受けていると一般的に認識されている。(沖縄と中国は、正式に朝貢関係を結んだのが1372年であった。それから1879年の「琉球処分」までの500年余り、この朝貢関係が続いていた。この期間、中国の武術が他の文化と同様、沖縄に影響を与えたと考えられる)。しかし、沖縄空手と中国武術の関連性についての学術的な研究はあまり行われてこなかった。

その理由について、以下のようなことが考えられる。

まず、沖縄においても、中国においても、空手(武術)は「口伝」などで教えるのが一般的で、そのためか他の分野と比べると残されている資料が少ない。

次に、空手(武術)家の学者・空手(武術)を専門とする学者は比較的が少ない、そのため空手(武術)についての研究が行われる機会も少なくなる。

そして、もう一つの理由として考えられるのは、特殊な言語の問題である。ここでいう特殊な言語の問題というのは、単なる日本語と中国語の問題を指すのではなく、沖縄方言と福建方言の問題を指すのである。沖縄空手の伝統的な用語は基本的に沖縄方言で表しているが、型の名称の〈nai han chin〉(ナイハンチン)は福建の閩南方言の〈lai huan cian〉(内反戦)、〈sai fa〉(サイファー)・〈ku run fa〉(クールンファー)・〈ho fa〉(ホーファー)・〈pa sai〉(パッサイ)・〈ne pai〉(ネーパイ)・〈su pa rin pe〉(スーパーリンペー)のそれぞれは福建の福州方言の〈sai hua〉(獅法)・〈kun lun hua〉(滾龍法)・〈hou

hua) (鶴法)・(pa sai) (拍獅)・(nei pai) (二十八)・(so ba lin pai) (壹百零八)と似ている。また、沖縄古武道の (nun tya ku) (ヌンチャク)・(tin be) (ティンベ)は、福州方言の (luon tsai koun) (両節棍)・(tin pe) (藤牌)と似ている。

沖縄空手の型の名称の例からみても、沖縄空手と中国の関連性は非常に高いと言えよう。一方、近代に入って、沖縄空手の礼儀・作法・制度などは日本武道の影響を強く受けてきて、それ故、現在は外見だけで沖縄空手と中国武術の関連性を見つけ出すのが難しくなっている。

そんな中、沖縄空手道場に現在祀られている武神についても、多くの道場は日本的となっている。ところが、伝統的な沖縄空手の武神、いわゆる「ブサーガナシー」というと、中国の「九天風火院三田都元帥」のことを指すのである。

なぜ沖縄空手の伝統的な武神として、中国の「九天風火院三田都元帥」が祀られているのか。また、中国の「九天風火院三田都元帥」がどのようにして沖縄空手の「ブサーガナシー」となったのか。そもそも中国において、「九天風火院三田都元帥」とはどういう神であるのか。本稿は、このような疑問について、一考を試みたい。

2、順道館の武神

現在、沖縄において「空手道会館」の建設が予定されていて、多くの中学校で必修科目としての武道に沖縄空手が選ばれ、その授業で使うため新に「普及型Ⅲ」が認定されるなど、空手は新しい発展段階に入っているといても過言ではない。一方、沖縄空手は特に近代以後、日本武道文化の影響を多く受けてきて、多くの空手道場で日本の武神を祀っている中、伝統の沖縄空手の武神―「ブサーガナシー」を祀っている道場もある。

那覇市安里にある沖縄剛柔流空手道総本部順道館は、2013年11月に開館60周年を迎える(図1)のであるが、順道館で祀られている武神(図2)について、筆者は2013年4月に順道館を訪れ、宮里善博館長よりお話しを伺った。



図1 順道館開設60周年記念大会チラシ



図2 順道館正面に祀られている武神像

宮里善博館長によると、順道館に祀られている武神は通称「ブサーガナシー」、宮里栄一(1922-1999年)前館長が順道館を開設する時からずっと祀られて来た。現在、この武神は順道館の象徴にもなっている。

順道館は沖縄伝統空手の三大流派の一つである剛柔流の一大組織・沖縄剛柔流空手道総本部ともなっている。その所属の道場は、日本本土・アメリカ・カナダ・イタリア・イギリス・オーストラリア・南アフリカ・シンガポールなど世界中に分布している。創始者宮里栄一前館長本人は、かつて空手道範士十段の資格を持ち、沖縄剛柔流空手道協会会長(1969年)、沖縄県空手道連盟の第1・2代理事長(1981-90年)を勤めた。また、1990年に沖縄空手道連盟第3代会長となってから、1999年に亡くなるまで会長を連続5期で勤めた。

では、順道館でそもそもなぜこの武神を祀るようになったのか。それは、恐らく宮里栄一前館長の師匠であり、沖縄剛柔流空手の開祖である宮城長順(1888-1953年)を抜きにして語ることは不可能であろう。なぜならば、順道館のこの武神、かつては宮城長順が信仰していたものであったからである²。

宮城長順は、中国の武術に大変関心を寄せていたようである。

大正初期、宮城長順は当時沖縄在住の福州出身の武術家と親しく交流をしていて、1915年に福州出身の鶴拳の名手呉賢貴(1886-1940年)と一緒に福州を訪れていたという³。

1925年5月、宮城長順をはじめとする沖縄空手大家達は「沖縄武道協会」を立ち上げ、沖縄空手の本場たる「南清」(中国南地方)に研究員を派遣することを「沖縄武道協会」の一つの大きな目的とした⁴。

1930年、『沖縄伝武備志』の「法剛柔吞吐」の「剛柔」の二文字をとり、自らの流派を「剛柔流」と名乗り、はじめて空手道の流派名を確立した⁵。

1936年、上海精武体育会を訪れ、当時の「総教練」趙連和とも交流を深めた⁶。

また、宮城長順は自身の「琉球拳法唐手道沿革概要」で、1828(清道光8)年の時に福建拳法の一支配が沖縄に伝わっていた、と述べている⁷。

以上より、宮城長順は中国、特に福建武術に関心を寄せていたことがうかがえる。また、『沖縄伝武備志』(福建鶴拳のことが書かれている)についても、研究をしていたこともうかがえる。これらのことは、宮城長順が『沖縄伝武備志』に現われる「九天風火院三田都元帥」のことをなぜ武神として信仰するよ

うになったきっかけとなるかもしれない。もう一つの要因として、呉賢貴の影響もあると思われる。大正年間に福州より来琉した呉賢貴が経営する「永光商店」の2階での稽古は、夕方から2時間くらいだった。稽古は、まず始めに、中央欄間に祭られた『九天(ママ)府火院三田都元帥(ブサーガナシー)』の前に、正座して一礼してから始められた⁸とあるように、呉賢貴の永光茶行での稽古風景が述べられ、そこに、「九天風火院三田都元帥」が祀られていることがうかがえる。呉賢貴は宮城長順と親交があり、「大正から昭和10年代に沖縄の空手家に相当の影響を与えた人である⁹」と言われるように、呉賢貴の道場に「九天風火院三田都元帥」が祀られていたことが、宮城長順の「九天風火院三田都元帥」の信仰に一定の影響を与えたのではなかろうか。

では、そもそも順道館の武神、いわゆる宮城長順がかつて信仰していた武神の像はどこからきたのか。これについて以下のような一文がある。

剛柔流に伝わるブサーガナシーこと「武神像」は沖縄伝『武備志』(白鶴拳の伝書)に「九天風火院三田都元帥」として紹介されている。真玉橋景洋(宮城長順の門下生)が南洋群島(サイパン)に渡った時に現地のサイパン人に依頼して木彫りしてもらった。それを、戦後帰還した時に師・宮城長順に贈呈した。「真玉橋景洋→宮城長順→宮城夫人→宮里栄一」に継承された(1955〈昭和30〉年頃)「武神」は現在、剛柔流空手道「道順館」(前館長・富里栄一)に剛柔流空手道の守り神として祀られている¹⁰。

この説明文から、順道館の武神の像は、宮城長順の門下生である真玉橋景洋(1896～1983年)が太平洋戦争の時期にサイパンに渡った時、現地のサイパン人に依頼して、『沖縄伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」を木彫りしてもらったことがわかる。また、戦後、真玉橋景洋が武神の像を沖縄に持ち帰って師匠の宮城長順に贈呈したことも分かる。そして、宮城長順が亡くなった後、宮城夫人が武神の像を順道館の開館記念に宮里栄一に贈っていた¹¹こともうかがえる。ここでもう一つ指摘できることは、真玉橋景洋がサイパン人に武神の像を彫ってもらったことから、当時宮城長順をはじめ、まわりにいる弟子達にも「九天風火院三田都元帥」に対する尊崇のようなものがあつたのではなかろうか。

3. 『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」

順道館の武神の像は『沖繩伝武備志』から来ていることが分かったが、そもそも『沖繩伝武備志』とはどういうものなのか。ここで『沖繩伝武備志』について概観してみたい。

一般的に『武備志』といえば、中国明代の天啓元年(1621年)に刊行された茅元儀¹²の『武備志』のことを指している。茅元儀の『武備志』



図3 茅元儀の『武備志』

(1984年に華世出版社より復刻された「華世本」、図3を参照)は、「序文」、「自序」、「凡例」、「總目」、「卷目」そして「本文」240巻、全部で約200万文字以上、図像は700枚余りである。その「本文」の構成は、「兵訣評」、「戦略考」、「陣練制」、「軍資乘」、「占度載」の五大項目から成り立っていて、兵書、戦例、地図、武芸、兵器の製造法等々を収録し、古今の兵論に関して詳しく説いている一大兵法書である。



図4 比嘉世幸本『沖繩伝武備志』

一方、沖繩空手の秘伝書とされている『沖繩伝武備志』(「比嘉世幸本」の場合、図4を参照)は、全部で約1万文字、29項目(標題を基本とした筆者の分類)、72枚の図像から構成されていて、その内容は中国武術、特に福建白鶴拳系の事について語ったものである。

『沖繩伝武備志』は、中国清代の福建拳術白鶴拳系の拳法書と思われるものであるのに対し、茅元儀の『武備志』は中国歴代の軍事書籍などを編纂して一大兵法書にまとめあげたものである。茅元儀の『武備志』に比べると、全然別個のものであり、その内容は似ても似つかぬものである。にもかかわらず、長い間この『沖繩伝武備志』は、多くの沖繩空手家に「武備志」と呼ばれてきた。このままだと、茅元儀の『武備志』と混同されやすいから、両者を区別するため、高宮城繁氏¹⁴は「沖繩に伝わる『武備志』」で、両者の違いを指摘、「沖繩に伝わる武備志」のことを初めて「沖繩伝武備志」と呼ぶことにした。以来、「沖

『沖繩伝武備志』という呼称は幅広く使われるようになった。『沖繩伝武備志』の呼称については、「武備志」「武備誌」「沖繩伝武備誌」などの呼び方があるが、本論文では「沖繩伝武備志」という呼称に統一する。

『沖繩伝武備志』の中に拳法の理論や技術について説いた部分がある。そのため空手の貴重な指導書とみなされたのか、昭和のはじめごろから沖繩で読まれるようになった。¹⁵『沖繩伝武備志』の「六機手」に基づき、剛柔流開祖宮城長順は柔法としての型「転掌」を創った。¹⁶そして現在、空手の大家と称される人々によって筆写、研究が行われてきて、現在、『沖繩伝武備志』は系統図(図5)のように「天尊廟本」の系統、「松村宗棍本」の系統、「糸洲安恒本」の系統、「呉賢貴本」の系統の四つの系統に分かれ、多数の筆写本・活字本が存在している。¹⁷

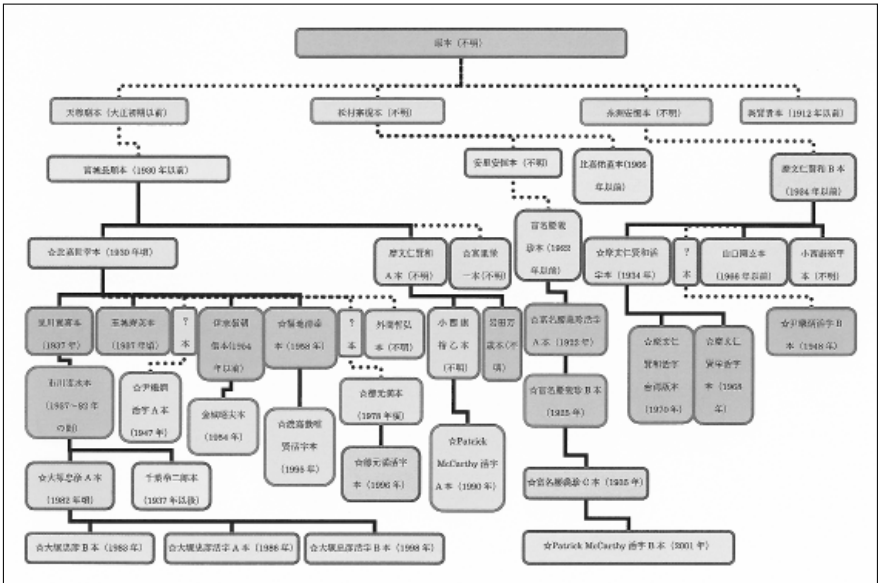


図5 『沖繩伝武備志』の系統図(括弧内は成立年、…は推測、☆は確認出来たもの)

この『沖繩伝武備志』に登場する「九天風火院三田都元帥」は一種変わった服装を身に着けていて、しかも「天尊廟本」の系統の諸本中で確認できた最も古いものである「比嘉世幸本」(図6)と「糸洲安恒本」の系統の諸本中で確認できた最も古いものである「摩文仁賢和活字本」(図7)を見比べると、大分異なっていることがわかる(「呉賢貴本」の系統は不明、「松村宗棍本」の系統に図像がない)。

「比嘉世幸本」では、「九天風火院三田都元帥」とし、図像はよりシンボリックに描かれている。そして続きに拳法の構えをした「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」も描かれている(図8)。これに対して、「摩文仁賢和活字本」では、「九天風火院三田都師帥」の構えは基本的と同じであるが、「九天風火院三田都師帥」とし、構えた両手の所にそれぞれ「名曰蟹手」という文字が書かれている。そして「九天風火院三田都元帥」のほかに、右手に旗を掲げている「靈狗大將軍」が描かれている。その背中に「勇」、下の方に「金獅」という文字が書かれている。このように、両本にはいくつか異なるところがみられるが、「九天風火院三田都元帥」の左手を下に、右手を上にした「二本指」の形とした「構え」と「呼称」などからすると、同じく「九天風火院三田都元帥」を描いていると考えられる。しかし、「比嘉世幸本」には「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」はあり、「靈狗大將軍」がない。「摩文仁賢和活字本」はその逆である。

このように『沖繩伝武備志』の「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」に登場する「九天風火院三田都元帥」についていくつか異なった点がみうけられる。一方「九天風火院三田都元帥」は、沖縄空手界において武神として祀られているが、この「九天風火院三田都元帥」について、沖縄空手界はどのように認識しているのか。これについて、空手の先行言説を概観してみたい。

4、空手研究における「九天風火院三田都元帥」をめぐる言説

『沖繩伝武備志』出自の「九天風火院三田都元帥」について、空手研究にお



図6 「比嘉世幸本」の「九天風火院三田都元帥」図像



図7 「摩文仁賢和活字本」の「九天風火院三田都元帥」図像



図8 「比嘉世幸本」の「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」図像

いては、以下のような説が唱えられている。

①外間哲弘『沖縄空手道の歩み』（1984年）

外間哲弘『沖縄空手道の歩み』が「九天風火院三田都元帥」を初めて採り上げた研究である。同書では、沖縄の天尊廟に祀られている「九天応元雷声普化天尊」という道教の神をとりあげ、道教と空手の関係、「九天風火院三田都元帥」が拳法の神様になったと推測している。しかし、「九天風火院三田都元帥」が具体的にどういう存在であるかについては、言及していない。また、「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」との相異点についてもふれていない。

②大塚忠彦『沖縄伝武備志』（1986年）

大塚忠彦『沖縄伝武備志』は、表紙に「九天風火院三田都元帥」の図像を載せ、目次の所に「表紙の武神は九天風火院三田都元帥」と示しているが、本文の中には、「九天風火院三田都元帥」を収載せず、「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」のみを載せている。（1991年の大塚忠彦『沖縄伝武備志』（改訂版）¹⁸では、本文の中に「九天風火院三田都元帥」も収載し、左に「武神（九天風火院三田都元帥像）」と改めている。）

以上、大塚忠彦『沖縄伝武備志』では、「九天風火院三田都元帥」について、「武神」であると示した以外、ほとんどふれていない。

③渡嘉敷唯賢『沖縄空手秘伝 武備誌新釈』（1995年）

渡嘉敷唯賢『沖縄空手秘伝 武備誌新釈』は、「九天風火院三田都元帥」について、「福建省武術協会の協力を得て」解釈を試み、①外間哲弘『沖縄空手道の歩み』、②大塚忠彦『沖縄伝武備志』のレベルから歩を進めて、福州地方における「九天風火院三田都元帥」信仰に初めて言及したものとなっている。

まず、「九天風火院三田都元帥」については、田都元帥、田相公、元帥爺などの別称があり、唐の著名な楽工雷海青であるとする説の存在を紹介している。更に、雷海青が義死後、唐の皇帝により「梨園都総管」に封じられ、また皇帝を救ったことにより「田公元帥」と呼ばれ、武人の姿にされたといわれていることも指摘した。

次に、「九天風火院三田都元帥」の「三田」については、①明宗を救うにあたり三度靈験を顕わした。②三人兄弟であった。③旗の「靄」字の雨冠が雲でさえぎられたためその下の、田の三文字のみ(畠)がみえた。④母親の姓の「蘇」

と養父の「雷」及び父なし子のため曾つて「田」野に棄てられたため、その共通の文字(蘇と雷はともに田の字が入っている)をとって「三田」とした、と少なくとも四つの説があることを紹介した。

そして、「九天風火院三田都元帥」が閩劇などで祖師爺(職業神)として祀られ、武術界において「会楽宗師」として祭られていること、一部の村落では守護神とされていることなどを紹介している。また、元帥廟は福建の各地にあり、元帥の両側には侍者四体が控えていて、内側は二胡を演奏する「鄭二伯」と夾板を手にした「鄭二母」、外側は「黒舎人」「白舎人」であることも示している。

しかし、渡嘉敷唯賢『沖繩空手秘伝 武備誌新釈』は、「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」に登場する「九天風火院三田都元帥」の違いについてふれていない。「比嘉世幸本」の「鄭二伯」「鄭二母」「黒舎人」「白舎人」が「九天風火院三田都元帥」の侍者である(楽器を手にした格好と拳法の構えた格好の違いはまず置いておこう)と説明がついていても、「摩文仁賢和活字本」の「靈狗大將軍」が何であるかについては一切ふれていない。また、「元帥廟」は福建の各地にあるとしながらも、福州以外では「九天風火院三田都元帥」がどういうふうに語られているかについて言及していない。

④大塚忠彦『中国、琉球武芸志』(1998年)

大塚忠彦『中国、琉球武芸志』では、「福建省武術協会の陳君琬の協力と東大の窪徳忠の指導のもと」、「『武備志』の武神の出自のこと(田都元帥)」と題して、新しい見解を示した。

同書では、③渡嘉敷唯賢『沖繩空手秘伝 武備誌新釈』と同じく、「九天風火院三田都元帥」は唐の楽人・雷海青であり、「鄭二伯」「鄭二母」「黒舎人」「白舎人」は「九天風火院三田都元帥」の侍者である、という見解を示した。ただ、「九天風火院三田都元帥」の性格の変化について、③渡嘉敷唯賢『沖繩空手秘伝 武備誌新釈』が問題にしなかったのに対し、同書は、「音楽神がなぜ武神になったのか」と問いかけている。大塚忠彦『中国、琉球武芸志』では、「雷海青の田都元帥」が「九天風火院三田都元帥となって福建長楽県の氏神となり、やがて『武備志』の中の武神となる¹⁹」と、『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」は、「雷海青の田都元帥」、「福建長楽県の氏神」から変化してきたことと述べられているが、具体的な説明はなされていない。「九天風火院三田都元帥」

の名称について、同書は「その名称は、察するに道教の天尊の神であり、雷神の第1位とされる、九天応元雷^(マ)芦普化天尊からその位を取り入れたのではない²⁰か」と述べているが、これもまた具体的な説明はなされていない。また、「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」に存在する「九天風火院三田都元帥」の違いについてもふれていない。

⑤金城昭夫『空手伝真録—伝来史と源流型—』(2001年)

同書では、福建省泉州地方を調査して、「九天風火院田都元帥像について」と題してとりあげて説明した。そのなかで同書は、永春県では現在はないが、昔の白鶴拳武館に「九天風火院田都元帥府」と書かれた赤い紙が正面に貼り付けられていたこと、また、泉州木偶劇団において、「九天風火院田都元帥」は雷万春(これまでの雷海青説とは異なり)であり、音譜を発明し、大火を一吹きで消す威力の持ち主であることが伝えられていることを明らかにした。

しかし、同書は、『沖繩伝武備志』の「三田都元帥」は「田都元帥」の誤りと説いてはいるが、具体的には説明していない。また、「泉州木偶劇団の九天風火院田都元帥像」は『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」と大分違っていて(「泉州木偶劇団の九天風火院田都元帥像」は座ったままの格好に対し、『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」は拳法を構えた格好となっている)、『沖繩伝武備志』に登場する陪神はもちろんのこと、「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」に登場する「九天風火院三田都元帥」の違いについても説明がなされていない。

①～⑤をまとめると、①と②は、「九天風火院三田都元帥」について武神であると指摘したに止まっている。③④⑤とも、中国の唐の時代の人物(③④は雷海青であると伝えられている福州の事例をとりあげ、⑤は雷万春であると伝えられている泉州の事例をとりあげ)で、亡くなった後「神」となったと説いている。また、「九天風火院三田都元帥」は、音楽の神、武術の神、村の守護神としても祀られていると説明している。しかし、「九天風火院三田都元帥」は福建の各地に信仰されていることを知りながらも、③④は福州、⑤は泉州の例を取り上げているだけで、ほかの地方の事例では「九天風火院三田都元帥」がどういうふうに語られているかについて言及していない。また、「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」に登場する「九天風火院三田都元帥」にみられる相異

点が何を意味しているかについてもふれていない。

「九天風火院三田都元帥」という言葉自体がもつ意味については、『中国、琉球武芸志』のみが「その名称は、察するに道教の天尊の神であり、雷神の第1位とされる、九天応元雷声普化天尊からその位を取り入れたのではないかと述べている。ただし、具体的には説明はなされていない。

『道教事典』²²では「普化天尊」の項に、「雷祖天尊のこと。九天普化天尊・九天応元雷声普化天尊ともいう。雷祖天尊は九天の上に居て、五雷をおさめ、九天に応化し、雷霆都府及び二院(五雷院・馭邪院)・三司(万神雷司・雷霆都司・雷霆部司)を総管しているので、九天応元雷声普化天尊と呼ばれる」と「九天応元雷声普化天尊」について説明している。「九天風火院三田都元帥」という項目は収録されていないが、「元帥」については、「義死または枉死した者が死後に元帥号を受け、辟邪や地域の守護に効験を顕わす神として祀られたもの」と説明されている。やはり「九天風火院三田都元帥」も『沖繩空手秘伝 武備誌新釈』『中国、琉球武芸志』『空手伝真録—伝来史と源流型—』が指摘したように、雷海青(或は雷万春)が死後、皇帝によって元帥号が与えられ神となったのか。また、「武神」について、「道教における武神は、主に天界の守護や魔を退治するなどの役割を担うものが多い。(中略)一部を除いてあまり地位の高い神はない」と、「武神」があまり地位の高い神ではないと説明している。以上のことからみてもわかるように、「九天応元雷声普化天尊」と、「元帥」「武神」などの神とは大分性格が違っていることがわかる。したがって、『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」は「九天応元雷声普化天尊」と重なるものであるとは考えられない。

5、中国福州における「九天風火院三田都元帥」

先学でみてきたように、「九天風火院三田都元帥」は中国の福建地方において信仰されていることがわかる。しかし、先学で取り上げられている例では、『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」の拳法の構えをした格好を説明することができない。

『沖繩伝武備志』の「摩文仁賢和活字本」には「九天風火院三田都元帥」のほかに「靈狗大將軍」、「比嘉世幸本」には「九天風火院三田都元帥」のほかに

「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」が描かれている。これはどういうことを意味しているのか。同じ「九天風火院三田都元帥」を指すはずなのに、なぜこのような違いが生じたのかという疑問が残る。

これらの疑問を解くため、2009年3月から数回に亘って『沖繩伝武備志』と深い関係をもつ福州で「九天風火院三田都元帥」について調査した。筆者が「祖殿元帥廟」を訪れ、福州市道教協会郭美英会長より直接説明を受け、資料などを提供してもらった。その結果、以下のようなことが分ってきた。

①福州市内の元帥路（1975年に河を埋めて作った道）には「九天風火院三田都元帥」を祀る「祖殿元帥廟」（図9）という道教の廟が存在している。正門の左側の提灯に「九天風火院」、右側の提灯に「三田都元帥」という文字が書かれている。正面入って手前の部分は昔は劇の舞台であったという。奥の方は正殿となっていて、そこに「九天風火院三田都元帥」とその陪神などが祀られている。

②「祖殿元帥廟」に祀られている「九天風火院三田都元帥」の別称は「九天探花府三田都元帥」ともいう。また略称として「三田都元帥」「田都元帥」「田公元帥」「田元帥」「田公」などともいう。

③「祖殿元帥廟」の「九天風火院三田都元帥」の陪神に「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」、使いに「赫煞何大将」が祀られている。（図10）

④「九天風火院三田都元帥」の構えは、「祖殿元帥廟」のものと『沖繩伝武備志』のものとは基本的に同じである。「九天風火院三田都元帥」は左膝を上げて立っていて、左右の手はともに「二本指」の形で、左は下、右は上に構えている。「使者」について、呼称（「赫煞何大将」と「靈狗大將軍」）の違いはあるが、形としてはともに右



図9 福州市の「祖殿元帥廟」



図10「祖殿元帥廟」の「九天風火院三田都元帥」とその陪神



図11「祖殿元帥廟」の「会楽田宗帥」の旗

手に旗を掲げている。しかし、「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」は、「祖殿元帥廟」では楽器を手にした格好になっているが、『沖繩伝武備志』では拳法の構えになっている。

- ⑤福州地方では、梨園界では「劇の神様」、武術界では「武術の神様」として祀られている(「学習拳曲者祀田元帥尊之日会楽宗師。訳：拳・曲を学習する者は、田元帥を祀り、之を尊んで会楽宗師と曰う)(図11)。時には地方の村に請来され、村の守護神にもなっている(多くの場合は「祖殿元帥廟」から)。
- ⑥現「祖殿元帥廟」の裏にある民家は、昔は武館(道場)で、そこには石の鍛錬道具がまだ残っている。その民家のある敷地も本来は「祖殿元帥廟」の敷地であったという。昔その武館は福州で一番大きな町道場であったという。(上地流空手の開祖上地完文の師匠とされている周子和も嘗てこの道場で教えていたと伝えられている。)²⁷
- ⑦福建・台湾などから福州の「祖殿元帥廟」に寄せられた「九天風火院三田都元帥」に関する論文(レポート)には、以下のようなものがある。「田元帥」、「戏神雷海青—田公元帥」、「小说歌(晚清):雷海青」、「琵琶圣手——雷海青」、「雷海青拒演」、「音乐家列传——雷海青」、「三田都元帥」、「雷海青砸琴为大义」、「师旷」、「田公元帥(莆田戏脸谱)」、「张巡、许远与雷海青」、「田公元帥在莆仙民间的“文武”之说」、「七古 乐工雷海青行」、「南方戏神“田元帥”与傀儡子」、「明清闽台地区雷海青信仰兴盛探微」、「闽西木偶戏神田公元帥」、「闽台戏神崇拜共一家」、「闽剧祖师爷的民间传说」、「龙岩市莲山庙与戏神雷海青」、「历史的滥觞」、「台湾梨園神信仰」、「雷海青生平简介」、「福州元帥庙祖殿」、「福建戏神祖庙福州元帥庙祖殿」、「林则徐与元帥庙」、「戏神田都大元帥」、「戏神田公元帥信仰」、「马祖北竿信德堂探花府赴大陆祖庙进香记实」、「闽台田都元帥信仰」、「闽台戏神田都元帥信仰」、「道教总庙三清宫——田都元帥圣纪」、「台湾宋江阵及戏曲之神『田都元帥』」、「台湾地区的田都元帥信仰之地」、「台湾传统戏剧的戏神信仰与禁忌」、「长乐金峰厚福乡游神队伍」、「福建畚族福愿」、「山楼田元帥府联」、「上杭木偶艺人祭“田公”」、「尚干镇后厝村九天风火院」、「戏神雷海青与同安后河宫」、「戏神雷海青与同安后河宫」、「戏神雷海青与“瑞云祖庙”」、「莆仙戏与雷海青」、「莆仙戏开台习俗——演“田相公踏棚”」、「闽杭“田公堂”木偶艺术研究会概况」、「陆丰皮影戏」、「戏神雷海青与“瑞云祖庙”」、「大

嶢谢氏护境圣灵—“龙泉宫”及“田都元帅”传奇！」などである(資料提供：福州「祖殿元帅廟」。それらを整理すると、福建各地で祀られている「九天風火院三田都元帥」のスタイルはさまざまで、その俗名は、「雷海青」(主に戯神)、「雷万春」(戯神と武神)、「田海青」(戯神と武神)などであることがわかる。

以上のことから考えると、「九天風火院三田都元帥」は地方によってさまざまな伝説を持つ存在であることがわかる。「雷海青」「雷万春」「田海青」などの人物の名前があげられているが、彼らはすべて唐の時代の人物であることについては一致している。また、主に戯神である場合と、戯神と武神の二重性を持つ場合のあることがわかる。祀られている像もさまざまで、座っているものもあれば、立っているものもある。さらに、「九天風火院三田都元帥」一体のみの場合、「九天風火院三田都元帥」と二体の侍者の場合、「九天風火院三田都元帥」と四体の侍者の場合などがある。このようななかであって、福州の「祖殿元帅廟」にだけ、「九天風火院三田都元帥」と四体の侍者(鄭二伯、鄭二母、黒舎人、白舎人)、さらに一体の使者(赫煞何大将)が祀られている。

このことと、『沖繩伝武備志』は福州藤山出身の76歳の王が口述したもので、『沖繩伝武備志』に福州方言が使われていることなどから考えると、『沖繩伝武備志』に登場する「九天風火院三田都元帥」は、「九天風火院田都元帥府」(座っていて、陪神なし)などと称される泉州地方などから沖繩にやってきたのではなく、直接福州地方からやってきたとされるべきであろう。

また、福州地方では、「九天風火院三田都元帥」は「劇の神様」であり、「武術の神様」でもあるとされている。このような二重性を持っていた存在が、『沖繩伝武備志』では「武術の神様」として現れていると捉えた方がよさそうである。なお、「摩文仁賢和活字本」の「靈狗大將軍」と福州の「祖殿元帅廟」の「赫煞何大将」とは、呼称は違うが、同じく犬の形をし、右手に旗を掲げた構えなどから見ると同じものであるといえよう。

福州の「祖殿元帅廟」には、「九天風火院三田都元帥」のほか、その陪神として「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」、使者として「赫煞何大将」が祀られている。このことからみると、「摩文仁賢和活字本」『沖繩伝武備志』は「九天風火院三田都元帥」とその「使者」を描き、一方「比嘉世幸本」は「九天風

火院三田都元帥」とその「陪神」を描いていると考えられる。

ところで、福州の「祖殿元帥廟」をはじめ、福建・台湾など現在確認されている「九天風火院三田都元帥」について、その由来の典拠には『三教源流搜神大全』が挙げられている。しかし、『三教源流搜神大全』には、「風火院田元帥」という項に次のような記述となっている。「帥兄弟三人孟田苟留仲田洪義季田智彪（中略）唐明皇封冲天風火院田太尉昭烈侯田二尉昭佑侯田三尉昭寧侯（図像は図12参照）」。



図12『三教源流搜神大全』の「風火院田元帥」

『三教源流搜神大全』の「田苟留、田洪義、田智彪の三兄弟」の説と福建・台湾などの「雷海青」「雷万春」「田海青」の説とは一目瞭然大きな違いがあることが分かる。これについては、『三教源流搜神大全』を編纂する際、ただ一地方の説を取り入れたにすぎない可能性があると思われる。現在、福建・台湾などに伝わる「九天風火院三田都元帥」の異なる説を、『三教源流搜神大全』の説でどうしても説明することができないのである。つまり、『三教源流搜神大全』が福建・台湾地方の「九天風火院三田都元帥」の由来典拠とすることは今後の研究において、改めて検討しなければならないのであろう。これは、各地域の独特な民俗文化を尊重することをあらわすためにも必要なことであるのではないか。

6. おわりに

沖縄空手の伝統の武神「ブサーガナシー」は、沖縄空手の秘伝書『沖縄伝武備志』に現れる「九天風火院三田都元帥」に由来するものである。一方、「九天風火院三田都元帥」は道教の神様で、福建と台湾を中心に信仰されているようである。俗名に「雷海青」「雷万春」「田海青」「田苟留、田洪義、田智彪の三兄弟」などの人物の名前があげられているが、すべて唐の時代の人物と思われる。また、福州地方においては、梨園界と武術界から「会楽宗師」と尊称され、「劇の神様」と「武術の神様」の二重性を持つ神として祀られている。しかし、『沖縄伝武備志』には「武術の神様」として登場しているように思わ

れる。「九天風火院三田都元帥」は「武術の神様」の特性を持っていることと、「比嘉世幸本」の「九天風火院三田都元帥」の陪神「鄭二伯・鄭二母」「黒舎人・白舎人」は拳法の構えをした格好となっていることなどを考えると、『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」は「武術の神様」として登場していることは疑う余地がないと思われる。

「比嘉世幸本」と「摩文仁賢和活字本」に登場する「九天風火院三田都元帥」にみられる相異点については、福州の「祖殿元帥廟」の例からみると、『沖繩伝武備志』の「摩文仁賢和活字本」には「九天風火院三田都元帥」とその「使者」が描かれ、一方「比嘉世幸本」に「九天風火院三田都元帥」とその「陪神」が描かれていると思われる。

また、「九天風火院三田都元帥」の呼称・スタイルなどと福州の「祖殿元帥廟」の事例などから考えると、『沖繩伝武備志』の「九天風火院三田都元帥」の出所は福州の「祖殿元帥廟」であるといえよう。

沖繩空手界において、剛柔流系では「九天風火院三田都元帥」が空手道の守り神として道場で祀られていることについては、開祖の宮城長順の影響があったことはいうまでもない。しかし、宮城長順はなぜ「九天風火院三田都元帥」を信仰し始めたのかについて、今の所は鶴拳の名手呉賢貴が一定の影響を与えたことは推測できるが、詳しいことはまだわかっていない。また「九天風火院三田都元帥」の陪神の役割、渡閩した空手の大家と「祖殿元帥廟」の関連についてもまだ多くの課題が残されている。

《謝辞》

本論文の執筆にあたり、沖繩県立図書館・沖繩県立公文書館・久米崇聖会・福建省福州市元帥廟祖殿管委會などの方々にお世話になりました。そして、大塚忠彦・郭美英・嘉手苺徹・川上喜信・具志堅正一・呉章平・佐久本嗣男・高宮城繁・張江南・渡嘉敷唯賢・徳元満・東恩納盛男・比嘉世顕・平山良明・外間哲弘・又吉清徳・宮城篤正・宮里善博の諸先生方より資料提供などのご協力を、また波照間永吉教授より多大なるご指導を、波照間ゼミの皆様よりあたたかいアドバイスなどをいただきました。心より感謝を申し上げます。

注

- 1.『球陽』球陽研究会編 角川書店 1974年3月 巻1の27参照。
- 2.『沖繩伝剛柔流空手道』 宮里栄一 実業の世界社 1978年7月 挿絵2。『沖繩空手古

- 『武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 534頁
3. 『沖繩伝剛柔流空手道』 宮里栄一 実業の世界社 1978年7月 11頁
 4. 「近代沖繩“空手”の普及発展」 盧姜威 『沖繩芸術の科学』 23号 沖縄県立芸術大学 附属研究所 2011年3月。『沖繩朝日新聞』 1925年5月23日
 5. 『沖繩空手古武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 532頁
 6. 『沖繩空手古武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 532頁
 7. 沖縄県立図書館に手書き原稿のコピーが収蔵されている。『沖繩伝剛柔流空手道』 宮里栄一 実業の世界社 1978年7月
 8. 『沖繩剛泊会空手道20年の歩み』 渡嘉敷唯賢 1986年8月 86頁
 9. 『沖繩空手古武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 429頁
 10. 『沖繩空手古武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 619頁
 11. 『沖繩空手古武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 534頁
 12. 茅元儀(1594～1644年)は、字は止生、号は石民で、東海波臣や夢閣主人などとも号し、帰安(今の浙江省呉興)の人である。(諸橋轍次 1960年5月初版 1974年9月縮写版第四刷 『大漢和辞典』 9巻 大修館書店 613頁)
 13. 白鶴拳は、永春白鶴拳、鶴拳、鶴法ともいわれている。福建の福州、永春、福清、長楽、莆田などでよく行われている拳法である。白鶴拳は、『沖繩伝武備志』にも示されているように、方七娘が鶴の動きを取り入れて編み出した拳法である。
 14. 『精説沖繩空手道—その歴史と技法』 上地完英監修 上地流空手道協会 1977年11月 223～233頁
 15. 『沖繩大百科事典』 下巻 沖縄大百科事典刊行事務局編 沖縄タイムス社 1983年4月 389頁
 16. 『沖繩大百科事典』 下巻 沖縄大百科事典刊行事務局編 沖縄タイムス社 1983年4月 389頁
 17. 「『沖繩伝武備志』の研究—諸本の系統関係について—」 盧姜威 『沖繩文化』 110号 沖縄文化協会 2011年11月
 18. 『沖繩伝武備志』 改訂版 大塚忠彦訳 ベースボール・マガジン社 1991年5月
 19. 『中国、琉球武芸志』 大塚忠彦 ベースボール・マガジン社 1998年7月 274頁
 20. 『中国、琉球武芸志』 大塚忠彦 ベースボール・マガジン社 1998年7月 274頁
 21. 『中国、琉球武芸志』 大塚忠彦 ベースボール・マガジン社 1998年7月 274頁
 22. 『道教事典』 野口鉄郎等編集 株式会社平河出版社 1994年3月
 23. 『道教事典』 野口鉄郎等編集 株式会社平河出版社 1994年3月 509頁
 24. 『道教事典』 野口鉄郎等編集 株式会社平河出版社 1994年3月 129頁
 25. 『道教事典』 野口鉄郎等編集 株式会社平河出版社 1994年3月 515頁
 26. 『沖繩伝武備志』の語り手と思われる人物王は福州の藤山の出身であり、また、『沖繩伝武備志』に「解辺」「牌套胶」「出珠」「血池」など多くの福州方言が使われている。
 27. 『沖繩空手古武道事典』 高宮城繁 等編著 柏書房 2008年8月 444頁
 28. 『三教源流搜神大全』 徐崇立著 葉徳輝重刊 宣統元年(1909年)

(ル ジャンウェイ)